

書評

最近のシュライエルマツハー
研究書について

高森 昭

ここに記されたのは最近のシュライエルマツハーの研究文献より、七冊の単行本をえらび、それ〴〵書評を行ったものである。この文章をまとめるに際して、執筆の時期（一九七四年夏）からさかのぼって、五年間のうちに発表された研究を対象を限定することとした。最近のシュライエルマツハー研究の大勢を把握するためにも、かかる時期の設定は己むを得ないものであると思つてゐる。また数多い研究書の中から、このたびは主として学位論文に関心を集中し、そこに見出されるシュライエルマツハー研究の新しい傾向に目を留めるように努めた。（なおシュライエルマツハー研究書全般については拙著、解釈学の諸問題、日本基督教団出版局、一九七四年、六三―六五頁、七〇―七二頁を参照していただきたい。）

D. Offermann, Schleiermachers Einleitung in die Glaubenslehre. Eine Untersuchung der „Leitsätze“, Berlin, 1969

もちろん信仰論の序論のみをもつてシュライエルマツハーの神学思想すべてを覆いつくすことは不可能である。この意味においては、本書はすぐれた特殊研究として今後も言及され続けらるであらうが、しかしシュライエルマツハーの思想を総括的に提示する基礎としては、なお多少せまいという懸念が残るのである。

M. Stiewe, Das Unionsverständnis Friedrich Schleiermachers. Der Protestantismus als Konfession in der Glaubenslehre, Witten, 1969

本書はシュライエルマツハーの信仰論は、プロテスタント合同教団の教義学として構想されたものであるとの視点から書き上げられている。信仰論の初版および第二版の検討に先立って、初期の頃からシュライエルマツハーがいだいていた教派合同の思想が検討される。ついで信仰論序説における神学的諸前提が分析されるが、その際にシュライエルマツハーが試みているプロテスタント的な敬虔 *Frömmigkeit* の信条学的位置づけに叙述の力点がおかれている。

さらに信仰論におけるプロテスタント諸信条の取扱いは、シュライエルマツハーはそれがプロテスタント精神の意識を表現するのであって、プロテスタント的教義が基礎づけられているのではないとの立場を明らかにすることが指摘されている。ま

本書はシュライエルマツハーの信仰論、パラグラフ三一―四（倫理学・宗教哲学・弁証論よりの借用命題）の綿密な解釈をほどすことに全力を傾倒した力作である。著者は、この信仰論第二版序論に含まれた、有名な借用命題の部分——しかも第二版に始めて、借用命題という表現が用いられた——を研究することにより、シュライエルマツハーが如何なる意味において、この序論に信仰論への導入という重要な役割をになわしめていかを明らかにしようとする。

信仰論の序論が、教義学と学問全般との関連を取り扱つてゐることは、すでに久しく認められ論争がくりかえされてきた。著者はシュライエルマツハーのテキストを詳細に検討した結果、信仰論の序論はあくまでもその目標、すなわちキリスト信仰とキリスト教会から解釈されるものであり、借用命題もまたこの目標の導入をはたすものであるとの結論に達している。かつて初期弁証法神学の批判がシュライエルマツハーに集中して以来、彼を思弁的宗教哲学者としてのみ見ようとする傾向が根強かつた。しかしそれは本書においては明らかに拒否されており、著者は注意ぶかくシュライエルマツハーのテキストそのものを検討することによつて結論に到達しようとする。この点では本書は、シュライエルマツハー研究の現状とレベルを良く示した著作として評価され得る内容をもつてゐる。

たこの様な合同教団の教義学という構想をシュライエルマツハーがいだくに至つた思想的関連を著者は探究し、シュライエルマツハーが啓蒙主義とロマンティクとの間に立つてゐたことをもつて結論としている。

本書は教会の神学者としてのシュライエルマツハーの一面に光をあてて研究した点では、かつての K. M. Beckmann および H. C. Albrecht などの業績と共に記憶されたいであらう。とくに最近の研究ではあまり論じられなくなつたシュライエルマツハーの合同教団のための努力（かくじ一八一十年の *Preussische Union*）と困難な斗争のあとを、あらためて認識させることに役立つと思われる。

しかし残念なことに本書の分析や叙述は、歴史的考察の面ではかなりの見劣りがする。むしろ著者が展開する信仰論に関する研究の部分（第二章および第三章）に見るべき内容があると思つてよからうと思われ。

F. Beifer, Schleiermachers Lehre von Gott dargestellt nach seinen Reden und seiner Glaubenslehre, Göttingen, 1970

本著作はシュライエルマツハーの神論を、今日の神学的状況との関わりをなかに探究したものである。著者は先ずこの研究にどりにむに際して、シュライエルマツハーの著作から、宗教

論と信仰論第二版の二つを取り出してゐる。この限定に対して当然予想される批判——弁証論その他の著作を考慮していない——に対して著者は、弁証論における本質的な問題は、信仰論において前提としておかれ取り扱われているとの立場に立っている。

本書の特色は著者がシュライエルマツハーにおける神は、存在するもの存在 *des Seie des Seienden* である点を、くりかえし強調しているところにある。この視点から著者は、すでに述べた如く、宗教論と信仰論について全般的な検討を展開しているが、こうした探究それ自体の当否は別として、本書がシュライエルマツハーの神論における内容を、ハイデッガーの用語をもって表現しようと試みたことは、たしかに注目すべき貢献であるにちがいない。また本書において著者がシュライエルマツハーは今世紀の神学的状況のなかに生きつづけていると主張しているのを我々は念頭におく必要がある。

しかしながら著者の主張の裏づけとして本書において展開されている宗教論および信仰論の検討には、なお難点があるように思われる。それは著者がシュライエルマツハーの宗教論と信仰論、とくに後者はその全体にわたっての検討を行わねばならなかったことも関係している。したがって細部にわたるとなると論議の余地を残す結果が生じているのは避けられなかったのだ。

こうした点から明らかのように、本書において直接、間接にふれられたシュライエルマツハーの著作は非常に広い範囲に及んでいる。すなわち、それは弁証論・倫理学などの哲学関係の著作より、イエスの生涯・信仰論・説教およびキリスト教倫理などの神学部門の諸著作にわたることとなった。まさにこの点に本書が持つ意味が示されていると思われる。著者がアメリカ人であることを考えると、これだけの材料を正しく扱うのは決して容易な仕事ではないことを我々は忘れてはならない。のみならず本書には、シュライエルマツハー研究史のうえから見ても、興味と関心をそそられる事柄が示されている。それは第一に著者によつて、シュライエルマツハーの「イエスの生涯」に関する講義は、イエスの神の国についての思想が中心とされていたという主張がなされていることである。そして、この事実を先ず D・F・シュトラウスによつて無視され、ついで A・シュヴァイツァーのイエス伝研究史に引き継がれたまま、今日までシュライエルマツハー研究において、そのままに放置される結果となつたとする著者の指摘となつて表われている。

第二にシュライエルマツハーの神学における神の国に注目す

ある。一例をあげれば、本書において著者が神の属性に関して述べるところは、私見によれば、いさゝか言ひすぎのきらいがあり、本書に先立って発表された G. Ebeling, *Schleiermachers Lehre von den göttlichen Eigenschaften*, ZThK 1968, S. 439-494 の示す結果とかなりぐんだたりを示しつつある。こうした点から本書は、さきにふれた D. Offermann の書物とは対照的な方向を示した研究書として取り扱われ得るべきであろう。

M. E. Miller, *Der Übergang, Schleiermachers Theologie des Reiches Gottes im Zusammenhang seines Gesamt Denkens*, Gütersloh, 1970

これはアメリカ出身の神学者がハイデルベルグ大学に提出した学位論文を出版したものである。著者はシュライエルマツハー神学では、その「神の国」概念の中に倫理における諸問題をとく鍵が含まれているという視点を立っている。さらに彼は神の国がシュライエルマツハー神学に対して持つ意味を明らかにするばかりでなく、その思想体系全般に対する意味を問うことによつて、シュライエルマツハーの思想における哲学と神学との関係構造を明らかにしようとする意図をもっている。その際に著者はシュライエルマツハーの思想体系の基盤にあるものとして、プラトンに由来する「移行」*Übergang* の概念をとり

ることを通して、これまで哲学者・神学者・思想家としてのシュライエルマツハー研究が比較的多く取り上げられてきたなかになら、あらたにキリスト教倫理の局面から光を当てる試みを示したことである。この点は最近のシュライエルマツハー研究のなかでも、すべし Y. Spiegel, *Theologie der bürgerlichen Gesellschaft. Sozialphilosophie und Glaubenslehre bei Friedrich Schleiermacher*, 1968 が見せた方向であるが、ここにまた一つの研究が加えられたことは歓迎されてよいと思ふ。

しかしながら、これまで述べた本書の強味は同時に弱点につながり得る。それは本書における論述と展開は、シュライエルマツハーの著作のかなり多くのものにまたがらざるを得なくなつた結果、どうしても厳密な論証と説得力の強さには今ひとつの感を抜けきれない。すでにふれた様に、いくつかの点では優れた研究として評価できるものの、しかしこうした欠点をほらんでいることは指摘しておかねばならないであろう。

E. H. Quapp, *Christus im Leben Schleiermachers. Vom Herrnhuter zum Spinozisten*, Göttingen, 1972

本書は四四〇頁に及ぶ大部な研究書であり、その手堅く克明な論述には学界の注目が集まつてゐる。その内容はシュライエ

ルマツハーの初期、とくに宗教論の刊行以前における彼の思想形成を取り扱ったものである。全体が二部に分られ、一七七八年から八七年までを「ヘルンフト兄弟団信奉者から啓蒙主義者へ」、さらに一七八七年から九六年までを「啓蒙主義者からスピノーザ主義者へ」とそれ／＼副題を附して論述が展開されている。なお本書においては割愛されているが、著者はこれに続いて一七九六年から九九年（宗教論初版発行の年）までを「スピノーザ主義者からロマン主義者へ」として、シュライエルマツハーの思想形成を跡づける構想を持っているものと思われる。

シュライエルマツハーの生涯を知るためには、こんにちもなおデイルタイによって記された *Leben Schleiermachers* (一八七〇年初版) は欠かすことの出来ないものとなる。しかし著者は本書において若きシュライエルマツハーの思想形成に中心的役割を果たしたのはキリスト論の問題であり、スピノーザ・ヤコービ・カントを始めとする多くの思想家との接触は、むしろこの点からより良く説明されるとの視点に立って論述を展開している。この意味では、若き日のシュライエルマツハーの思想形成を考察するに際して、デイルタイ以後われ／＼は久方ぶりに興味ある研究史の一面を加えることが出来たと云えよう。

デイルタイとの対比ばかりでなく、本書の貢献するところは、シュライエルマツハーの初期思想が次第に明らかにされることを通して、宗教論の成立の背景を知ることが出来るに至る点である。これまで宗教論の研究において、とかく不明であり進展がはばかしくなかった、その思想的成立の背景を究明するために、今後本書は重要な発言をなすことであろう。これに関連して、とくに評価したいのは本書の附録には、スピノーザ主義とヤコービとに関するシュライエルマツハーの草稿二点が、始めて活字となって公開されたことである。シュライエルマツハーの著作全集が未だに刊行されていない現在、これら未公開の原稿が発表されることは、まことに貴重な貢献なのである。

F. Weber, *Schleiermachers Wissenschaftsbegriff. Eine Studie aufgrund seiner frühesten Abhandlungen*, Gütersloh, 1973

本書はシュライエルマツハーにおける学問の概念を明確にすることを試みた研究のひとつであり、このあとにふれる予定の E. Herms の著作とともに、最近のシュライエルマツハー研究の傾向を適切に示したものと云える。著者はシュライエルマツハーの学術的著作に見出される客観的学問性が、シュライエルマツハーその人、そしてその思想形成に如何なる意味をもつ

ていたかを問う意図から出発する。その際に著者はシュライエルマツハーの初期に示した論文に注目する。すなわち一七八七年ヘルンフト兄弟団を退いたのち、一七九六年ベルリン滞在を始めるまでの時期における諸論文に限定したのは、本書の注目すべき点であろう。これらの文献は、これまでデイルタイその他の学者によってシュライエルマツハーの原稿から編集されてはきたがなお幾多の不明確なところがあった、いわゆる問題のテキストとされてきたものである。著者はあえて、これに光をあてることに踏みきり探究を進めている。一例をあげれば *Über das höchste Gut* (一七八八/八九年) は、さきに言及した M. E. Müller による研究がなされた際に、ベルリン科学アカデミーの書庫に保存されているシュライエルマツハーの原稿から直接に複写され公表されたものを、ここでも使用しているのである。

したがって本書の貢献は、シュライエルマツハーにおける学問の概念に関して従来とかく明確でなかった、その形成期における不可欠の材料を明るみに出したところにあると云えよう。シュライエルマツハーの著作すべてを今日の学問的水準に耐え得る形で編集した全集が存在していない現状から見ても、たとえもどかしく見えようとも本書に示される様なステップは通り抜けねばならぬ道であろう。

後期のシュライエルマツハーにおける学問の概念、また神学の位置づけに関する彼の円熟した姿を明らかにする研究は、これまでシュライエルマツハー研究の極めて重要な課題として窺らぬ関心を持たれてきた。ただそこへ至るためのステップとして、初期のシュライエルマツハーにおける学問の概念を、その思想形成との関連のなかで掘りおこして見ることがどうしても必要であるし、まさにこの点こそが従来の際れた研究においても弱点として指摘せねばならぬところであった。シュライエルマツハーの学問概念に基本的には統一はあっても、その初期においてすでに各種の緊張を含んでおり、それらは後期の思想に引き継がれているとする著者の結論は、むしろ読者には始めから予想されていたところであろう。しかしそれにも拘らず読者は本書によってシュライエルマツハー研究が現在、到達している着実かつ精密な論議の組立てかたに接することが出来るであろう。この意味で本書は、比較的頁数の少ない研究書でありながら、熟読によって教えられる点の少くない内容をもっている。

E. Herms, *Herkunft, Entfaltung und erste Gestalt des Systems der Wissenschaften bei Schleiermacher*, Gütersloh, 1973

本書はシュライエルマツハーにおける学問体系の形成過程を

詳細に探究した労作であり、手堅い手法が賞かれた研究として記憶されるものである。著者はあくまでもシュライエルマツハーの神学のおよび哲学的思想を理解するために、彼の学問体系的形成過程を神学史的に明らかにすることに徹底しようとしている。本書においてはシュライエルマツハーにおける学問体系的形成を、ヘルンフォート兄弟団との対立の時期から説きおこして、ハルレ大学教授として就任する一八〇四年に及ぶ時期までにわたって探究している。この点では本書の方がさきに言及した F. Weber による研究よりも広範な時期を取り扱っている。であり、本書の利便さは認められて良いであろう。

著者が本書において示している神学史的な研究の進め方は、何よりもシュライエルマツハーがその初期に刺戟を受けてきた思想家との関連をさぐっている点に見出される。すなわち J. A. エバーハルト（ハルレ大学教授）、カント、ヤコービ、F. シュレーゲルなどの思想家との関係が集中的に探究され論じられている。

このほか本書においても、これまで未公開の資料であったヤコービに関する論文をすでにふれた *Über das höchste Gut* を、著者はシュライエルマツハーの原稿より複写したものをよって熟知しており、我々にとっても研究の進め方に関する示唆をあたえられる。とりわけ著者によって始めて明らかにされた

ハルレ大学における J. A. エバーハルトの講義題目（一七八六—九〇年の期間）は誠に貴重なものである。

もちろん神学史の研究は地味な仕事であるばかりでなく、その結論は複雑な姿をとることが多い。とりわけ本書のようにシュライエルマツハーにおける学問体系的形成を跡づける場合には特に然りであろう。にも拘らず、著者がシュライエルマツハーの思想形成を地道に考察した結果、多くの思想家との接触による刺戟が考えられるなかに、シュライエルマツハーがハルレ大学において勉学の時をもった際の哲学教授、J. A. エバーハルトからの影響を強調する結論に到達したことは、今後あらためて検討をせまられる内容をまっとうしていると考えられる。

附記

以上かんたんにふれた最近のシュライエルマツハー研究書のほか、いわゆる研究入門として次の著作は最も適切なものと考えられるので指摘しておきたい。

H.-J. Birkner, *Theologie und Philosophie, Einführung in Probleme der Schleiermacher-Interpretation*, München, 1974

- 31) F. C. Burkitt, *The Journal of Theological Studies*, Vol xxv, No. 98, art. "Tatian's Diatessaron and the Dutch Harmonies." pp. 113-130.
- 32) G. F. Moore, *Society of Biblical Literature*, Vol ix, 189^o art. "Tatian's Diatessaron and the Analysis of the Pentateuch." pp. 201-215, esp. p, 203.